書評

『隠された子どもの叡知』
北ドイツの治療教育施設での記録

川手鷹彦　著　誠信書房

現代社会の諸矛盾は、そのもっともやわらかな、或いは、弱い部分である教育場面において噴出する。国内外の様々な教育問題の中にそのような病理的光景を見せつけられてきた。一方においてコンピュータリゼーションに伴う情報化・国際化が進展し、来年に迫った二十一世紀には、これまで見られなかった新世界が訪れるかのような幻想を抱く人々の胸中に、成長への道を閉ざされたこれらの病理を演じる子供達の叫びが、バタフライナイフのきらめきの如くに突き刺さる。

しかし、このような状況に対し、見て見ぬ振りをして手をこまねいている文部省をはじめとする学校教育関係者をしり目に、一人の勇気あるセラピストがロマン主義の風を巻き起こしながら、今、立ち上がろうとしている！　そして、その人物こそが、この本の著者である言語セラピスト(ドイツでは言語テラポイトという)の川手鷹彦氏である。

今回の彼の著作は、ドイツにおけるそのような彼のロマン主義的な治療教育実践の記録である。川手氏は、ドイツのリューベック近郊に広がる森に囲まれた治療教育施設ハウ

ス・アーリルドで、てんかん症、自閉症、ダウン症など様々ないわゆる〝障害〟を抱えた子供達に対して、ゲーテやC・F・マイヤー等の詩の朗読を通して、彼の言語セラピーを試みる。彼は場合によっては『耳なし芳一』をドイツ語に訳して施設の子供達に語りかけたりもする。

川手氏によれば、これらの物語詩に秘められた〝言語の力〟によって、障害を担った子供達は確実に癒されていく。この場合、言葉や文章または特定の作品が伝えようとする思想もさることながら、言葉の音や響き、韻律、リズム、そしてその雰囲気、色彩、香り、感情も重要な役割を演ずる。

しかし、この著作は、彼の言語セラピーの理論――それは、あのニーチェを超えたといわれた哲学者、ルドルフ・シュタイナーの教育哲学に深く影響されているものだとしても、本質において彼の独自の思索や実践に基づくものである――を単に表明するために書かれたものではない。叙述のそこここに見られる彼のあふれ出るような感性の発露や北ドイツの不思議な魅力をたたえた森や自然との共感は、「内面への道は神秘へと通じる」と考えた、十九世紀初頭のノヴァーリスなどに代表されるドイツ・ロマン派的なみずみずしい文体を構成し、本来散文的になりがちなノンフィクションであるはずの叙述形式に詩的なニュアンスを与えている。したがって彼のこの実践記録は一種の文学としても読むことができる。

私が特にこの記録の中で興味を感じたのは、かつて岩波書

店が発行していた『ヘルメス』というポスト・モダニズムを意識した雑誌に連載された、第一章「ブリーストルフ便り」もさることながら、むしろ、「回想」と銘打たれた第二章の末尾を飾る、てんかん症児ゲッツ・Kへの体ごとぶつかってゆく川手氏の姿である。ここで彼は「堪えがたい苦しみに悩む」ゲッツ・Kにある場合、同化或いは、文化人類学者ならば〝即融〟とでも呼ぶべき体験をすることさえもいとわない。

そして、この二人の魂のシンフォニーとでも言うべき状態の中から流れ出づる次の言葉は美しい。

——私は、この「便り」の中で何度か申し上げた。人間の裡に隠された「叡知」は、たとい肉体的な「障害」というヴェールに被われてはいても「叡知」という神秘であることに少しの変わりはなく、それはいつしか呼び醒まされ励まされて「障害」を貫いて光り輝き出づることができるのだ……と。

ここにすべてが言い尽くされている。私としては、九〇年代の日本で、セラピストとして常に私の一歩前を歩きながら、この言語セラピーを展開してきた著者の営みが、今回このような出版の形式で結実したことに喜びを禁じ得ないが、つい最近までアメリカのプリンストン高等研究所で、ノーベル文学賞受賞者の大江健三郎とともに、哲学的研究を繰り広げていた中村雄二郎氏が、この本の序文を書かれて、川手氏の諸活動に対して賛辞を惜しまず、彼の才能を広く世に送り出そうとしていることを、ここに付け加えるにとどめよう。

ただ、教育哲学の研究者として私が他に何か言いうることがあるとすれば、例えば、この著作の中で用いられている、旅中断想、すなわち、アフォリズムという形式の中に見出される彼のいわばカリスマ的な着想の煌きは、今後さらなる哲学的、理論的著作が現れることを予感させるためのプレリュードに過ぎないということである。

昔、知り合いのイタリア人の神父が、私が知る限り、布教するのがもっとも難しい国が日本だと呟いていたことがあったが、終戦後、経済成長の結果いち早く高度消費社会に突入し、およそ何に関しても理念というものを喪失した現代の日本の大衆社会において、例えば、神戸の少年A事件のような「非行」に関しても障害児に対しても全く同様なセラピューティックなアプローチを試みてきた著者が、今後どのようにして、戦後理念的に民主化し健全化したドイツにおける実践経験を、日本の教育病理の中にアレンジし、適用してゆくのかということが、今、問われている。

著者はすでに九〇年代初頭から、表参道の「青い丘」という名の研究所においてそれを展開しているが、今後は彼のこのドイツ・ロマン主義的な言語セラピーが、そのような存在意味を喪失しかけた日本の教育状況をいかにして改善し、その本来のドラマ性を回復してゆくことができるのか、いつもながらの見事な手並(マニュアル)を拝見してゆきたいところである。

(明星ビル㈱ティー・セラピー研究室　黒川　五郎)